

富山モデルプロジェクト

ESD実践報告

富山市立堀川小学校

持続可能な発展のための教育

目 次

1	はじめに	7
2	全体計画	8
	① 指導目標	
	② 育てたい力	
	③ 研究体制	
3	授業における子どもの育ち	10
	1 部会 第3学年 理科「身近な自然で見つけたこと」	
	① 単元の趣旨	
	② 教科の目標とE S Dで育てたい力との関連	
	③ 子どもの追究	
	2 部会 第4学年 社会科「わたしたちのくらしと路面電車」	
	① 単元の趣旨	
	② 教科の目標とE S Dで育てたい力との関連	
	③ 子どもの追究	
	3 部会 第5学年 国語科「棕鳩十の作品－大造じいさんとガン－」	
	① 単元の趣旨	
	② 教科の目標とE S Dで育てたい力との関連	
	③ 子どもの追究	
	4 部会 第6学年 算数科「表やグラフで伝えたいこと」	
	① 単元の趣旨	
	② 教科の目標とE S Dで育てたい力との関連	
	③ 子どもの追究	
4	特別活動における子どもの育ち	18
	① 委員会活動の紹介	
	② 全体合唱の取組み	
5	地域との連携 ー地域教育推進協議会での取組みー	19
	① 地域教育推進協議会について	
	② 地域との一体感が育まれる地域教育懇談会	
	③ 協働し、つながりを深める近隣ファミリー活動	
6	おわりに	20
	① 授業の中でこそ育つ力	
	② 様々な教育活動における取組みから	
	③ 地域ぐるみでE S Dを実践するために	
	④ 次年度に向けて	
	＜参考資料＞ E S Dにかかわる本年度の研究経過	22

持続可能な発展のための教育

1 はじめに

本校では、2012年6月11日付けで「ユネスコスクール」としての加盟が承認されたことを契機として、本年度より「持続可能な発展のための教育」に取り組むこととした。その教育は、略称のE S D (education for sustainable development)として、本校のような「ユネスコスクール」が研究実践に取り組み、その推進役を担っている。

そもそも、持続可能な発展のための教育（以下、E S Dと記す）は、2002年に開催された国連会議「持続可能な開発に関する世界首脳会議」（ヨハネスブルグサミット）において、わが国が「持続可能な開発のための教育の10年（2005－2014）」を提案したことに端を発する。同年の第57回総会では、2005年からの10年間を「E S Dの10年」とすることが決議されるとともに、ユネスコが主導機関として指名されている。

国内では、2006年、関係省庁連絡会議で実施計画が策定され、2008年、中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（1月）、教育基本法第17条に定められた「教育振興基本計画」（7月）に、E S Dの必要性が示された。そして、小学校学習指導要領解説では、「総則」「社会科」「理科」「生活科」「家庭科」「外国語活動」「道徳」「総合的な学習の時間」の中で、E S Dに関する教育内容について触れられている。

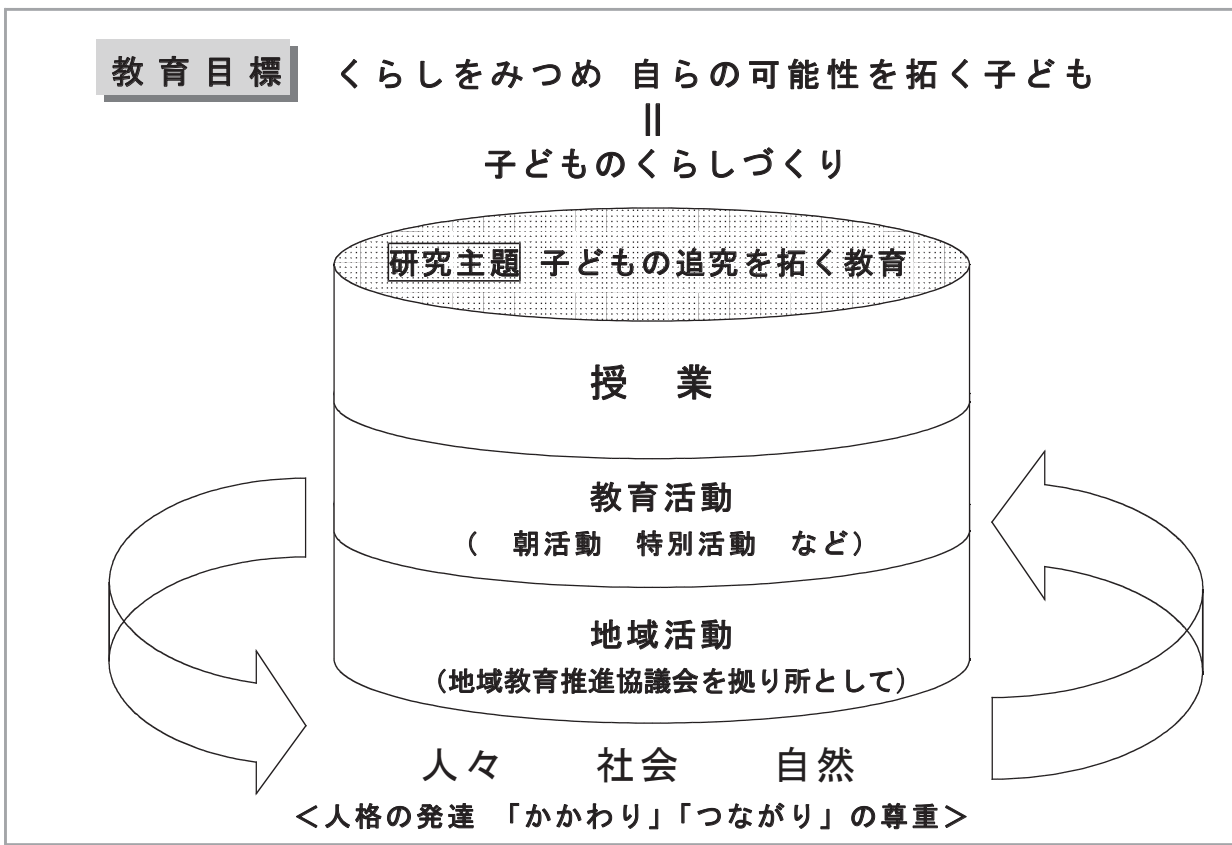
学校教育では、子どもたちのために教科・領域との関係性と均衡性、教育課程との包括性を十分意識する必要がある。E S Dでは、学校全体の教育課程をどう編成するのかという認識を前提としつつ、子どもの学習や教材そのものが、教科・領域を超えてつながり、かかわり合うことを重視する。また、学校と保護者や地域住民とのつながりやかかわりも重視している。さらには、眼前の子どもたちとそれに続く将来世代だけではなく、現世代に生きるわたしたち大人同士のつながりやかかわりを大事にする教育である。

このように整理すると、本校がE S Dに取り組むことにはきわめて必然性がある。本校では、可能性に満ちた子どもたちが教育という営みを通して追究の主体として育つことを目指しており、「子どもの追究を拓く教育」を研究主題としている。本校で言う「追究」とは、求めてやまないすがたであり、真実に向かって全力をあげて究めようとするものである。当然のことではあるが、その追究には、教科・領域を超えたつながりやかかわりが生まれ、子ども同士、子どもと大人とのつながりやかかわりが生まれてくる。

また、「地域教育推進協議会（＊1）」の開催やそれに伴う一連の教育活動は、学校と地域・保護者とのつながりを深め、子どもも大人も一体になって、持続可能な未来のために必要な知識・知恵、リテラシーやスキル、生きる希望や自己肯定感を高めているものである。

＊1 昭和56年設立。地域の教育力を高めるため、年2回校区の各種団体が一堂に会する。

2 全体計画



① 指導目標

先述したように、E S Dでは、人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むことを大切にしている。また、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「かかわり」「つながり」を尊重できる個人を育むことを大切にしている。すなわち、社会や自然や人々とのつながりを吟味しながら、自分の在り方をみつめることになる。このことは、本校の教育目標「くらしをみつめ自らの可能性を拓く子ども」に示すとおり、くらしづくりを基盤とした教育である。くらしづくりとは、子どもの生活そのものの主体であり、それは子どもが生きる社会やかかわる人々や自然すべてのものとつながってこそ成り立つものである。

そこで、本校におけるE S D指導目標を次のように設定した。

各教科等の授業やその他の教育活動全体の中で、持続発展教育の基本的な考え方を生かした取組みを推進し、過去に生きた先人、今、未来を生きるすべての人々のことを考え、よりよい社会づくりにかかわろうとする力を育てる。

「各教科等の授業」と「その他の教育活動全体」は子どものくらし全般を意味している。授業だけでなく、本校の教育活動の中心である朝活動やくらしのたしかめ、特別活動など、すべての教育活動が含まれる。当然、子どものくらしづくりを基盤とした教育活動を展開するためには、地域や世界の社会や人々にまで視野を広げる必要があり、さらには今をつくり上げてきた昔の人々に思いを馳せたり、これから先の未来を予測することも必要となる。そのように、まずは、子どものくらしを広くとらえることを大事にしている。私たちは、本年度、E S Dに取り組むにあたり、今の子どもたちのくらしづくりを基盤にしながら、そこで育てたい力を整理し、明確に示すことから始めた。

② 育てたい力

研究主題として掲げている「子どもの追究を拓く教育」における追究とは、子どもがくらしの中で出会う、ひと、もの、できごとなどと心をつなぎながら、真実を求めて全力を尽くしていくことである。その中で発揮される思考力や、形成されていく価値観がE S Dの考え方に合致する。また、ひと、もの、できごとと自分とのつながりを吟味しながら、よりよい自分、よりよい社会をつくろうと取り組み続けるには強い意志や継続させていくための力も必要であり、持続可能な社会づくりの担い手を育てることにもつながる。

また、私たちは授業の中で、仲間との「学び合い」ということも大事にしている。それは、個人だけでは到達不可能な学びの深まりも期待できるからである。まさに、コミュニケーションそのものが学びを支える要素である。

これまで述べてきたように、本校のくらしづくりの中に、これらのE S Dで願う力が育つ基盤は十分にあると考える。そこで、本校では、E S Dで育てたい力を次の4つに整理統合した。そして、今ある各種教育活動において、これらの力が子どもに身に付いているかどうかを確かめながら、次項に示すような体制で研究・実践に取り組んだ。

- | | |
|---|---|
| ア | 論理的思考力、多様な観点から考察する能力、情報収集能力 |
| イ | 豊かな感性と持続可能な発展に関する価値観を見いだす力
(人間の尊重、多様性の尊重、機会均等、環境の尊重 等) |
| ウ | コミュニケーション能力 |
| エ | やり遂げる強い意志と継続する力 |

③ 研究体制

(1) 中間研究部会による授業研究

本校では校内研究組織として、4つの研究部会がある。それぞれが授業者をたて、単元検討から、指導計画、授業実践まで行う。学習指導においては、前述した4つの力と教科の目標との関連を明らかにしたうえで実践する。そこで、単元を提示する前に、右図のようにマトリックス

	関心意欲態度	科学的な見方
ア	E S Dで育てたい力	教科の目標、 (評価の観点)
イ	四季の変化や自然の 美しさに心を寄せる。	教科の目標とE S D の育てたい力に共通 した子どもの姿

形式でその関連を位置づけ、具体的な子どもの姿を描くようにする。E S Dとして育てたい力を明確にすることで、より具体的な指導の手立てにつなげることができる。

(2) E S Dの視点を大切にした教育活動

授業以外では、主要な教育活動として朝活動やくらしのたしかめ、自主活動がある。また、特別活動では子どもの主体性を引き出しながら、児童集会や委員会活動に取り組むようにしている。地域活動も含め、これらの活動を日々のくらしの中で大切にしていけることが、E S Dの力が子どもに確かなものとして身に付いていくものと考えている。なお、本年度は校舎周りの環境整備にも重点を置いて取り組んでいる。子どもたちは身近な環境に主体的に働きかける活動を通して、つながりを大切に思う心を育み、人や自然、社会とのつながりを深めている。

次章より授業研究と特別活動、そして地域活動においてとらえた子どもの育ちを述べ、E S Dにおける取組みの成果と課題を明らかにしていきたい。

3 授業における子どもの育ち

1 部会 第3学年 理科「身近な自然で見つけたこと」

① 単元の趣旨

子どもたちは、身近な自然に興味や関心をもってかかわっていく中で、心を動かされた自然の事物や現象を観察し、仲間に紹介していく学習を行っていく。その中で、より詳細に探究的に観察を続けながら、子どもの感性が磨かれていくと思われる。

また、その対象とする自然には、生き物や環境も含まれており、自分たちのくらしとのつながりから、自然や環境とかかわることの意味を考えたり、生命を尊重していこうとしたりする態度が養われていくものと考えている。

② 教科の目標とE S Dで育てたい力との関連

		理 科 の 目 標			
		関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	知識・理解
E S D で 育 て た い シ ョ ン 力	ア 論 理 的 思 考 力 等	- 生き物を大切にしていこうとする。 - 自分が生きている環境を大切にしていこうとする態度を身に付ける。 - 身の回りには多くの変化や心動くことがあることに気づく。	- 観察を続けながら、生き物の意図あるくらしぶりや適応の知恵等を見抜いていく。 「比較」を用いて、不思議なこと、驚いたこと等を見つけ、累積していく。	- 見つけた事実や現象はいかにして起こるのか推察する。 - 自分自身や仲間の見つけ方について整理し考える。 - 見つけたことがなぜ不思議なのか、驚くのかを自らに問う。	- 対象に合わせ、虫眼鏡等を正しく活用する。 - 天候や生き物等の状態や条件は再現性に乏しく、物理的な現象は何度も再現できることに気づく。
	イ 豊 か な 感 性 等	- 四季の変化や自然の美しさに心を寄せ、味わい、大切に育んでいこうとする。 - 諸感覚を用い、対象を全身でとらえていこうとする。 - 過去の経験等を総動員し、理解していこうとする。	生き物は環境に適応してくらしていることを、事実をつなぎながら、見つけていく。	生き物の巧みなくらしの知恵等を見つけ、環境に適応してくらしていくことの意味をとらえていこうとする。	- 生き物には多様性があり、それゆえに生存・発展してきたことを理解する。 - 自分や自然に生きる物は、周りの環境やそれらと深くかかわり合って生きていることを理解する。
	ウ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 力	- 仲間の話を主張点に沿って、共感的に聴いていこうとする。 - 仲間の着眼に敬意を表し、自分に取り入れたり、自分のよさをみつめたりしていこうとする。	- 仲間の着眼について、科学的に吟味していこうとする。 - 仲間の見つけたことに関心を向け、自分の経験をつなぎ、自分の見方を顕在化していく。	- 自分の考えを分かりやすく端的にまとめ、表現していくことができる。 - 仲間の見つけ方に学び、自分の見つけ方の方法を変化させていく。	伝えるためには、何をどのように要約し、主張することがよいのかを理解し、その方法を活用していく。
	エ 強 い 意 志 等	根気強く感性を磨いていくことで、見える世界が広がり、今まで気にならなかった現象に立ち止まってみようとする。			

③ 子どもの追究

身近な自然を観察する体験を通して、見つける活動から探る活動へと転換し、自然と自分とのつながりをみつめていった子ども

＜ウ コミュニケーション能力 エ やり遂げる強い意志と継続する力＞

(1) 単元と出会い、たくさんのことを見つける中西君

中西君は、日頃から様々なものに興味を抱き、素直な心で対象とかかわろうとする子どもである。本単元でも、自然の中にある様々なものに興味の目を向けて、見つけたことを書き記すカードを次々と書きためていき、ついには37枚も教室に掲示するなど、「見つけること」に対して意欲的であった。校庭の木や沼のような水たまりなど観察する対象も様々であり、広い視野をもっている。



また、自然に対して、自分なりの仮説を豊富にもっており、見聞きする事物・現象について、「なぜ」「これは不思議だ」などと感じることも多かった。たとえば、粉のように思っていたグラウンドの砂がよく見ると小さな石であったということも、彼なりの仮説が覆される不思議な発見であった。このように活動していくうちに、見るもの聞くもの様々なことが気になり始め、結果として、カードの数が増えることになったのである。

(2) 仲間とのかかわりを契機に、一つのものにこだわって取り組もうとしていく中西君

第2回集団過程において、中西君は自分が見つけたたくさんのことを仲間を紹介した。すると、仲間は、多くのカードを書く中西君の意図や見つける視点が気になり、「(身近な自然に)どんなイメージをもっているの」と問うのである。これまで目的を意識せず心の赴くままにカードを累積していた中西君はとまどいを見せた。しかしこの問いをきっかけに、自分の活動を見直し37枚のカードに共通している「自然の不思議さ」といったテーマに気づいていくのである。その後、彼は「自分は不思議に思ってもそのままにしていたから、これからは気になることを明らかにしたい」と発言した。集団過程を契機に中西君は自らの取組みを振り返り「不思議」なものについて、とことん調べようと意欲を高めていった。

その後の中西君は、自分が一番、不思議に思っていることとして、「石がなぜ光るのか」を探りたいと、科学博物館を訪ね、岩石担当職員の方に質問した。石が光を保持し、反射する仕組みについて返答を受けた中西君は「なぜ」と思ったことを調べることで、さらに新しい発見ができることに大きな手応えや喜びを感じていくのである。

(3) 自分の手応えや喜びを支えに、仲間の取組みを共感的に受け止めようとする中西君

単元も終盤にさしかかった頃のことである。学級内は、様々な活動を通して自分なりの手応えや楽しみを獲得してきている子どもたちが多く見られた。そのような中で行った集団過程において、個々に違う仲間の取組みや発言に対して、中西君はすべて共感的に受け止めていこうとするのである。それは、これまで述べてきたように、中西君の追究の中に、多くの対象を見つけてきた手応えや一つの対象にのめり込んで観察や調査をしたことで分かる喜びを味わった経験があったからではないだろうか。仲間を契機に自分の取組み方や構えを変化させていったことで、仲間の話も広く受け止めることのできる謙虚な構えにつながったものと考ええる。そこに、中西君なりのコミュニケーション能力の変容があり、高まる姿がある。

2 部会 第 4 学年 社会科「わたしたちの暮らしと路面電車」

① 単元の趣旨

子どもたちは、富山市内を走る路面電車に関連する施設や設備、地域の人々の利用の様子や変化、他地域の路面電車と富山県の路面電車の違いなどについて調査や見学をしたり、資料を活用して調べたりすることを通して、自分たちの暮らしと路面電車とのかかわりについて考える。

また、環境や全ての人に配慮した路面電車の導入やコンパクトなまちづくりを目指す富山市の取組み等について理解を深める中で、地域への愛着を深めていくとともに、地域社会に生きる一員としての自覚を高め、自分はどうのように参画することができるかを考える。

② 教科の目標と E S D で育てたい力との関連

		社 会 科 の 目 標			
		関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技 能	知識・理解
E S D で育てたい力	ア 論理的思考力等	- 自分の課題に合う資料や情報を進んで集めていこうとする。 - 様々な調査方法で自分の課題を解決していこうとする。	- 路面電車の役割や自分たちの暮らしとのかかわりについて考えをまとめる。 - 他地域や他の路面電車との比較を通して、共通点や異なる点それぞれのよさを見い出す。 - 参考文献や聞き取り調査、アンケートなど多様な方法によって課題の解決を図る。	収集したグラフや表などの資料の中から、自分の課題の解決に必要な情報を正しく読み取ることができる。	- 富山県内には、路面電車が三か所で走っていることを知る。 - 道路を走る電車のことを路面電車と定義することを理解する。
	イ 豊かな感性等	自分たちの暮らしと路面電車とのかかわりについて、多面的にみていこうとする。	- 現在の路面電車の役割を考えるとともに、これからの富山市の発展と路面電車のかかわりについて考える。 - 地域の一員としてこれからのまちづくりに対して参画できることを考える。	路面電車の果たす役割について、参考文献や資料、聞き取り調査など様々な方法を通して具体的に調べる。	地域の発展において、路面電車の果たす役割について理解する。
	ウ コミュニケーション能力	- 調べたことから自分が考えたことを、表やグラフ等を用いて分かりやすく伝えようとする。 - 自分の考えと比べながら仲間の考えを聴こうとする。	どのような資料や事実から自分の考えを構築したのかを説明したり、表したりする。	自分の考えを自作の表やグラフ、基にした資料などを効果的に使いながら分かりやすく伝えることができる。	自分の考えを伝えるためには、どのような資料を用いたり、視聴覚機器を活用したりすればよいか理解する。
	エ 強い意志等	自分の課題を解決しようと聞き取り調査や体験活動等を繰り返し行おうとする。		表やグラフなどを取り入れながら、自分の考えを分かりやすくまとめる。	

③ 子どもの追究

路面電車が果たす役割について乗車体験や聞き取り調査など様々な方法によって具体的に調べ
ことを通して、自分と路面電車とのかかわりについて確かにしていった子ども
＜ア 多様な観点から考察する能力 情報収集能力 エ やり遂げる強い意志と継続する力＞

(1) これまでの経験を基に路面電車と自分とのかかわりについて考える荻野君

「路面電車とわたしたちの暮らし」と提示を受けた荻野君は、三年生の頃に市電に乗って体操の練習に毎日行っていたことを思い出した。そして、駅と駅との間隔が近くそれぞれの家からそれ程遠くない場所に駅があることから、市内電車はお年寄りにとって便利な乗り物であると発言した。しばらく市内電車が便利であるという発言が続いていたが、こうした発言に問いかけるように大田君は、「路面電車は本当に便利で役立つ存在なのか。みんなの役に立っていると言ってくれたけど、お年寄りの方やいろんな人に使ってもらえる存在なのか」と発言した。自分にとってもお年寄りにとっても便利であると考えていた荻野君であるが、大田君に返す言葉が見つからないようだ。「もっと路面電車のことを調べないと便利であることをきちんと伝えられない」と考えたのであろう。

(2) 調べ活動や仲間とのかかわりを通して路面電車への思いを確かにしていく荻野君

市内電車について思い起こす中で、自分が利用している市内電車以外にもポートラムという路面電車があることを知った荻野君は、日曜日にポートラムに実際に乗ってみることにした。どのような路面電車であるのか気になったのであろう。乗車体験を通して荻野君は、市内電車とポートラムでは、設備面において大きな違いがあることを感じた。

そのような中、第1回集団過程において林さんが、出入り口の段差が大きいことから「市内電車は、お年寄りにとって不便だ」と語ってきた。乗車体験においてポートラムのよさを感じていた荻野君は、「ぼくも不便だと思いました。それは、階段があるから車いすの人が乗れないからです」と振り返りノートに書いている。荻野君は、実際に体験してみることによって様々な立場の人々の思いや願いを実感することができると確信したのであろう。そして、「市内電車は不便である」という自分の思いを確かにするために、再びポートラムに乗ることを計画し、乗り比べをした。



(3) 自分自身の経験を通して路面電車への思いを確かにしていく荻野君

施設面において市内電車が、ポートラムと比べて不便であると考えていた荻野君であるが、集団過程の中で、古い市電が便利だと考える高校生がいたという仲間の話や、車いすの人が利用する際には、駅の人が手助けをしてくれるという仲間の話などを聴くことで、「不便ではないか」という自分の考えが揺らぎ始めた。そこで、怪我をして車いす生活を送っていた体操のコーチのことを思い出し、「もし自分が車いす生活になったら」「自分がお年寄りになったら」と、自分をその立場に置き換えて考えてみることにした。すると、やはり「不便ではないか」と自分の考えを確かにする一方、立場を置き換えて考えることで「便利か不便か」を考えるだけではなく、その不便さをいかに解消するかについて考え、アドバイスすることでみんなにとって乗りやすい市内電車になるのではないかと考えたのであった。

このように、本単元を通して、路面電車が果たす役割について乗車体験や聞き取り調査など様々な方法によって具体的に調べることで、自分の思いや考えを確かにする子どもがいる。また、よりよいものを目指し、自分にできることを考え実践する子どもの姿もとらえることができた。

3 部会 第 5 学年 国語科「椋鳩十の作品―大造じいさんとガン―」

① 単元の趣旨

単元名を「椋鳩十の作品―大造じいさんとガン―」とすることで、椋鳩十がどんなことを伝えたかったのか、大造じいさんの魅力は何かなどを考えたくなり、子どもは主体的に物語を読み進める。

また、椋鳩十の作品を読むことによって、動物との共生や動物愛護について考えていく。そして、考えたことを伝え合うことを通して、仲間の発言から自分の考えをみつめ見直したり、仲間の話を受け入れたりする。

② 教科の目標と E S D で育てたい力との関連

		国 語 科 の 目 標				
		関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語の知識・理解・技能
E S D で 育 て た い 力	ア 論 理 的 思 考 力 等	・ 椋鳩十の本を読もうとする。 ・ 椋鳩十について調べる。	・ 自分の考えが伝わるように話の構成を工夫する。	・ 自分が考えたことがらを決めて書く。	・ 椋鳩十が作品に込めた思いを考える。	・ 配当されている漢字を読む。 ・ 指示語の内容を理解する。
	イ 豊 か な 感 性 等	・ 人間と動物、人間と人間の関係について考えようとする。	・ 自分とは異なる考え方を受け入れようとする。		・ 狩人の大造じいさんとガンの関係について考える。	・ 比喻表現が意味するものを理解する。
	ウ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 能 力	・ 自分の考えを分かりやすく伝えようとする。 ・ 自分と比べながら仲間の話を聴く。	・ 仲間が伝えたいことはきっとこうだろうと推測して聴く。	・ 自分が考えたことがらを相手に伝わるように分かりやすく書く。	・ 自分の知識や経験と関連させて読む。	
	エ 強 い 意 志 等		・ 相手の話が分かるまで聴こうとしたり、自分の話が相手に伝わるまで話したりしようとする。		・ 文章を声に出して読む。 ・ 自分が気になったことについてじっくりと読み進める。	・ 既習漢字を用いて自分の考えを書く。 ・ 分からない意味の言葉を国語辞典で調べる。

③ 子どもの追究

言葉に意味を求め、叙述を基に想像をふくらませながら読んだり、仲間の話を聴いたりしながら自分の考えを深める子ども
＜ア 論理的思考力 イ豊かな感性 ウ コミュニケーション能力＞

(1) 残雪を保護し逃した大造じいさんに寄り添う道山さん

道山さんは、大造じいさんに寄り添ってひとり学習をしてきた子どもである。仲間を助けるためハヤブサと戦い傷ついた残雪を保護した後、逃がした大造じいさんを優しいととらえていた。自分が助けた相手をまた自分の手で獲ろうとする大造じいさんのことを納得できない部分もあったが、そこは敢えて考えないようにしていたようにも思われる。

1 1 月 2 2 日 集団過程より

黒川 大造じいさんは心を強く打たれて、残雪を助けたから、それは優しいなって、本当は敵なのに助けたから優しい。(省略)

T 黒川君や江山君の話を聞いて、どんなことを考えましたか？

道山 私は黒川君の話を聞いて、残雪と大造じいさんは敵だから、大造じいさんからしたら残雪は敵だからこそ、手当てをしてあげて、次に残雪が来る時にまた堂々と戦うために、傷を治してあげたりと・・・、そのまま放置しておいたら、たぶん死んでいたでしょ？たぶん大造じいさんにしたら、残雪と戦うのは楽しみっていうか、今まで失敗ばかりだったから、次こそはしとめてやろうっていう、わくわくっていうか、楽しみがあるから、そこで、全部自分の力でしとめてないから、次は、傷を治してあげて、最初から全部自分でやって、今回はハヤブサが半殺し、半殺しっていうか、少し弱らせてくれたから、しとめられるチャンスがあっただけで、最初から自分の力でやってないから、次は、残雪の傷を治してあげて、次の冬にしっかり、堂々と戦いたいと思った。

1 1 月 2 2 日 集団過程後のノート

私は、黒川君の話を聞いて、敵だからこそ手当てをしたのだと考えました。そのまま放っておいたら死んでいたと思うし、私が大造じいさんだったら手当てしていたけど、おりの中に入れるとか、そこまで優しくないと思います。

(2) 仲間の読みとの違いを契機に狩人としての大造じいさんの思いを想像する道山さん

道山さんは、黒川君の「敵なのに助けたから優しい」という発言をきっかけに、改めて自分の納得できていない部分と向き合って考え始めている。仲間の話を聴くことをきっかけにして、自分自身の曖昧な部分に目を向けたのである。そして、「敵だからこそ助けた」という考えを打ち出した。そこには、これまでの大造じいさんの努力について確かめることで、大造じいさんが残雪を相手に感じてきた狩人としての手応えについてとらえ、手ごわい残雪だからこそ万全な状態で戦いたいと願う大造じいさんであると考えた道山さんの思いがある。「残雪と戦うのは楽しみ」「わくわく」という道山さんの言葉に、大造じいさんが残雪のことを本気で相手にすべき敵として認めたことを確かにした思いがうかがえる。だからこそ道山さんは、「敵なのに助けた」という博愛主義ではなく、「敵だからこそ助けた」へと考えを変容させたのである。

道山さんにとって、これまで単に優しいととらえていた大造じいさんの人柄に、狩人としてのプライドや自分自身への厳しい面も明らかになることで、改めて作者が本作品を書いた思いについても目を向けるきっかけにもつながったと考える。

このように、道山さんは仲間の発言を契機として自分の考えに向き合い、ことばの意味を探りながら、自分の読みを確かにつくっていきこうとしている子どもであるといえよう。

4 部会 第 6 学年 算数科「表やグラフで伝えたいこと」

① 単元の趣旨

だれに何を伝えるのかということを意識しながら、表やグラフに表していく。目的に合う表やグラフにしようと、数値の取り方や表現方法を吟味し、よりよく伝える方法を考えていく。表やグラフで表すことで新たなことに気づいたり、相手に自分の考えが伝わる喜びを感じたりすることを通して、算数の有用性を感じ、進んでくらしの中で算数を活用していく姿を期待している。

また、様々な視点から資料を考察することを通して、多面的、総合的なものの見方を身に付け、情報をうのみにせず、自分の根拠をもち判断していこうとする力を育むことができると思う。

② 教科の目標と E S D で育てたい力との関連

		算 数 科 の 目 標			
		関心・意欲・態度	数学的な考え方	技 能	知識・理解
E S D で 育 て た い 力	ア 論 理 的 思 考 力 等	・自分の目的に合う資料を進んで集めていこうとする。	・自分の目的に合う数値の取り方や表現方法を考える。 ・一つの事象を様々な観点からとらえ、総合的、多面的に資料を読み取る。	・既習の学習を生かして、表やグラフに表すことができる。	・表やグラフの特徴を理解することができる。
	イ 豊 か な 感 性 等	・様々な着眼点で一つの事象を見ていこうとする。	・表やグラフを考察することから、くらしをよりよくしていこうとする。		・表やグラフで表すことの有用性を理解することができる。
	ウ コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 能 力	・表やグラフを用いて進んで自分の思いを伝えようとする。	・どのような数理事象から、自分の考えをもったのかを説明したり表したりする。	・自分の考えを表やグラフを効果的に使って説明することができる。	
	エ 強 い 意 志 等	・自分の目的を達成しようと、数値の取り方や表現方法をよりよくしていこうとする。		・自分の伝えたいことを表やグラフに表し、自分の思いを伝えることができる。	

③ 子どもの追究

伝える対象を決め、伝えたい思いを大切にすることによって、グラフの表現の仕方を吟味する子ども

<ア 論理的思考力 多様な観点から考察する能力 エ やり遂げる強い意志と継続する力>

(1) グラフを通して両親に感謝の気持ちを伝えたいと願う松山さん

松山さんは、単元「表やグラフで伝えたいこと」の学習の提示の授業において、自分の6年間の身長の変化の様子をグラフに表すことにした。そして、もうすぐ卒業であることを意識し、自分を育ててくれた両親に、このグラフを通して、感謝の気持ちを伝えたいという思いをもった。

自分の過去の身長や体重の数値を調べ、早速、折れ線グラフに表してみた。これまでの学習の経験から、折れ線グラフは、横軸に時間を取り、時間の経過にしたがって変化する様子を表すことに適していると考えたからである。しかし、プロットされた点とそれをつなぐ線で表された自分の身長の折れ線グラフは、温かみのない無機質なものに感じられた。そこで、折れ線グラフをやめて、人の形をした棒グラフで表し始めた。こちらの方が、自分が1年生から学年に上がるにつれて身長が伸びていることを表すのに適していると感じられたようである。

一つの学年で各学期ごとに測定した数値があるので、1年生の1学期、2学期、3学期というふうに、順番にグラフに表していった。松山さんは、グラフをつくっていくと、毎回、身長が伸びているはずなのに、そんなに身長の変化が感じられないという思いをもった。両親に成長した自分のことを伝えたいのに、このグラフでは、自分の思いは伝わらないと考えるようになった。

(2) 仲間と聴き合う中でグラフの表現の仕方を工夫し始める松山さん

第3回集団過程では、吉川君が、学級みんなに朝のトレーニングを頑張っていることを伝えるためのグラフの話をした。12日間の朝のトレーニングで100メートルを走った本数を累計し、上位5人を表した棒グラフや学級のどのくらいの割合の人が何本走っているのかを表す円グラフをつくっていた。いくつかのグラフで表したのは、全体の様子を伝えることも必要だが、頑張っている人も分かるように伝えたいということだった。

松山さんは、この吉川君の話を聴き、授業後のカードに「吉川君がグラフをたくさんつくって、新聞みたいに伝えていることが、すごいと思いました」と書いている。そして、次の活動では「学期ごとのグラフを書いたけど、もっとぱっと見て差が分かるのは、学年ごとだ」と書いている。吉川君の取り組みを知ることを契機に、分かっているすべての数値をグラフに表すことは大切なことであるが、いくつかの数値を抽出してグラフで表すことで、より分かりやすいグラフになると考えたのではないだろうか。

松山さんは、12月初旬にグラフを家に持って帰り、自分がこんなに成長したのは家族のおかげであることをグラフを基に話をした。母親が「すごく小さかったあなたが、大きくなったことが分かったよ。こんなに成長したんだね」と笑顔で感想を話してくれたということだった。

このように、松山さんは、これまでの知識や技能、仲間の考えとかかわらせながら、グラフの種類やグラフの数値を吟味して、自分の願いにあったグラフをつくり上げていく過程で、論理的思考力や多様な観点から考察する力が育まれたと考える。また、伝える家族を意識し、伝えたいことを明確にもつことで、妥協することなく納得のいくまで取り組み、やり遂げる強い意志と継続する力が育まれたと考える。



4 特別活動における子どもの育ち

児童集会の中で他とのつながりを深めていく子ども

<イ 豊かな感性 多様性の尊重 ウ コミュニケーション能力 >

① 委員会活動の紹介

11月に実施した「自分たちにできることを考えよう」集会では、子どもたちが世界の国々に暮らす人々、子どもたちのために自分のできることを考え、実行していくことをねらいとし、くらしづくり委員会、リサイクル委員会、ベルマーク委員会、それぞれの委員会から提案を行った。

リサイクル委員会の発表では、ペットボトルキャップ800個でワクチン1本になることや、ペットボトルキャップ収集に積極的に取り組んでいる学級の紹介等があった。集会後、ペットボトルキャップを収集することで、自分と世界の人々がつながることや、仲間の頑張りを感じた河田君は、学級のリサイクル係として、「世界の国々の子どもたちのために、もっとペットボトルキャップを集めよう」とみんなに呼びかけ、ファミリーごとにペットボトルキャップランキングをする計画を立てた。後日くらしのたしかめで、河田君が「今、4年2組で5667個のペットボトルキャップが集まって、うれしい」と発言をした。「今のところ何本のワクチンになるのかな？」という福山君の発言をきっかけに、現在、約7本であることが分かってきた。子どもたちは、キャップがたくさん集まっていることに喜びを感じる一方で、こんなに集めてもまだ、7本のワクチンにしかないのか、と意外な様子であった。しかし、福山君が「教室としては、7本だけど、ぼくたちは全校でしているのだから、もっとたくさんのワクチンになるはずだ。だから世界の人のために、もっと全校で協力したい」と発言をした。全校のみんなで力を合わせていくことで、さらに大きな力となることを改めて考えた場面であった。

各委員会の創意工夫を生かす中で、仲間の取組みの姿を紹介したり、自分たちのしていることが世界の国々に暮らす人々に、どのようにつながっていくのかを具体的に提案したりすることを通して、今後も子どもたち一人一人が自分のできることを明確にし、仲間と力を合わせながら実行する意欲を高めていく。

② 全校合唱の取組み

この集会に向け、全校合唱曲として「世界がひとつになるまで」を提案した。それは、「世界がひとつになるまで ずっと手をつないでいよう」という歌詞に着目したからである。この曲をみんなで歌うことで、この地球に生まれた者として、世界のみんなが心をつなぎ、互いに支え合っていくことの大切さが感じられるのではないかと考えた。集会では、生き生きとした歌声が響き、子どもたちの温かい前向きな心、みんながひとつになることを願う強い気持ちが伝わってくるようであった。



学年で練習をしているときのことである。「手をつないでいよう」と、繰り返し出てくる歌詞を何度も練習していくうちに、子どもたちの歌声が次第に力のこもった歌声に変わっていった。全校で歌う子どもたちの姿からも、さらに音楽に身を寄せ、一体感を味わっている様子が分かった。言葉が音楽と組み合わせることによって、共通のイメージが生まれ、互いの思いと音楽が一体になって膨らんでいくのである。本校では、今後も全校で歌声を合わせる心地よさ、一体感を感じる機会を大切にしていく。

5 地域との連携 ―地域教育推進協議会での取組み―

地域とのつながりに気づき、地域の人々との一体感を味わいながら、地域への愛着心を深めていく子ども

<イ 人間の尊重 多様性の尊重 ウ コミュニケーション能力 >

① 地域教育推進協議会について

本校では昭和56年に「地域教育推進協議会」を創設し、地域全体で子どもたちを見守っていく体制づくりが整えられた。校区の自治振興会をはじめ、校区の各種団体長や各町内会長、有成会（PTA）役員が参集し、子どもたちの健全育成、教育環境の整備を目的として本会が開催されている。全体会及び分科会、役員会は堀川小学校において年に2回開催している。

<本年度の協議会>

第1回 7月20日

- ・夏休みの生活について（学校）
- ・ふるさとクリーン大作戦について（PTA）等

第2回 12月14日

- ・冬休みの生活について（学校）
- ・放課後の暮らしについて（PTA）等



② 地域との一体感が育まれる地域教育懇談会

夏季休業中の半ば頃、各町内の集会場で町内会長や地域の保護者の方々を交えて行っている懇談会である。近隣ファミリー活動、ラジオ体操の実施状況、町内の危険箇所や問題点などについて、子どもたちが地域で安心して毎日を過ごせるように、情報交換が行われる。

<本年度の懇談会>

8月1日、2日、3日の3日間、夜の7時から8時までの間に行った。夏休み前半の諸活動の振り返りや、高学年の子どもたちが中心になって作成した「安全マップ」を基にした危険箇所の共通理解の場として各町内ごとに有意義な時間を過ごした。

大町1区西部では、相撲クラブの児童が、練習の状況と大会に向けた意気込みを紹介したり、町内会長さんが町内の危険箇所について、真剣な表情で子どもたちに注意を呼びかけたりするなど、保護者や子どもたちにとって有意義な懇談会となった。

③ 協働し、つながりを深める近隣ファミリー活動

長期休業中における子どものくらしづくりの基盤は地域にある。その地域において、近隣の子どもたちが集まり、共に奉仕活動や体力づくり、学習などを行っている。それが近隣ファミリー活動であり、「朝活動」から発展した活動である。夏休みや冬休みの前から、近隣ファミリーごとに集まり活動計画を立て、それを地域のPTA役員や町内会長に報告し、活動への協力を依頼している。また8月の後半にはクリーン大作戦として、地域の大人や中学生も一体になって美化活動も行っている。

<本年度の活動>

本年度の夏休みの活動としては、町内公園の除草、町内歩道の花壇の水やりなどの世話、公民館での学習会、公園での長縄跳びなど、各町内ごとに創造的な活動が実施された。大泉中部では、朝のラジオ体操後の短い時間ではあるが、1年生から6年生までが小グループを形成して、公園の周辺や歩道沿いのゴミを拾い集めている。高学年児童がゴミ袋を持ち、低学年児童が拾ってきたゴミをねぎらいの言葉をかけながら、袋に入れてあげている。その付近には数名の保護者が付き添い「自動車が来るよ」と子どもたちの安全を気遣いながら共に働いている。そんな光景が校区のいたるところで見られた。安彦忠彦は著書の中で地域との連携の在り方として「協働」の精神が大事であると述べている。まさに、地域の大人も子どもも年長者も年少者も、そこに関係する教職員も共に働いているこの活動は、地域や学校が一体になった「協働」の表れであり、「つながり」を増やし深める活動といえる。

6 おわりに

① 授業の中でこそ育つ力

4つの中間研究部会で研修を進めた授業では、前述したように、各部会ごとに子どもの育ちをとらえるように努めた。どの子どもも自分たちの暮らしと自然や社会とのつながりに気づき、さらに共に学ぶ仲間との絆を深めていく謙虚な姿勢が見られた。

1・3部会では、仲間の話を契機に仲間の受け止め方を広げていった中西君や、仲間の発言を契機として自分の考えを変容させていった道山さんの姿から、授業の中で、コミュニケーション能力（ウ）が確実に高まるということが分かってきた。何よりも子どもたちが仲間とのコミュニケーション自体を自らの取組みを振り返ったり、考えを見直したりするきっかけにしていることも、当たり前のようなのであるが、実に尊いことである。

2・4部会では、様々な体験を通して、路面電車のあり方を模索していった萩野君や母親に伝えたい思いを支えにグラフの表し方を工夫し粘り強く取り組んでいった松山さんの姿から、本部会の授業がその子らしい、多様な考えや表現を引き出している（ア）ことがわかった。そして、子どもの暮らしに身近であり、子どもの意欲をかき立てるような教材を設定したことも思いをもって粘り強く取り組んでいく（エ）子どもの姿につながったのではないかと考える。

② 様々な教育活動における取組みから

E S Dを推進していくにあたり、本年度、私たちが大切にしてきたことは、これまでも行ってきた朝活動やくらしのたしかめ、自主活動といった教育活動を従来通りに実践し、充実していくことであった。振り返ると、子どもたちは仲間や自然や環境とのかかわりの中で主体的に活動し学びを深めていった。



特別活動では、前述したように、児童会を中心とした委員会活動や児童集会を計画的に行ってきた。その他、学年ごとの校庭の環境整備や地域との連携をもとにした近隣ファミリー活動も継続的に行ってきた。校庭の環境整備では、日々の除草や落ち葉はきなどに懸命に取り組んだり、通路の柵にペンキで色を塗ったり、花壇を設けたりするなど創造的な子どもの姿が見られた。子どもたちが、自然や環境を美しく整えようと懸命に働くとともに、人とのつながりや絆も深めていこうとする姿も同時に見られ、E S Dとしての学び（豊かな感性、コミュニケーション能力等）が着実に育ってきていることを実感した。

③ 地域ぐるみでE S Dを実践するために

本年度も地域教育推進協議会を2回行い、地域でくらしている子どもたちの健全で安全なくらしのために情報交換を行った。また、近隣ファミリー活動として、子どもたちは縦割り班をつくり地域の公園や歩道の清掃活動などを行った。夏休みには、地域教育懇談会も実施した。参加された地域の方から「地域の子どもたちを地域の大人たちが育てる」という意気込みが感じられた。同時に子どもたちにとっても地域を愛する心情と地域社会に主体的にかかわろうとする心情が育ってきている。

④ 次年度に向けて

本校がユネスコスクールに加盟して、半年以上が経過した。E S Dとして取り組んできたことの成果として私たちがここで述べてきたことは、まだ私たちの考えの枠内にとどまっている。ただ、本年度の実践を通して明らかになってきたことがある。それは、本校で実践している子どものくらしを基盤とした教育は、人、自然、社会とのつながりを大切にするE S Dの考えと合致するということである。今後も自信をもって取り組んでいきたいと決意を再び新たにすることができた。



さて、E S Dの指導目標として掲げた「すべての人々のことを考える」「よりよい社会づくりにかかわろうとする」などの力を学校教育の中でどれだけ育てていくことができるだろうか。まだ研究は始まったばかりである。少なくとも私たちは、子どもの具体的な事実を基にした研究や、保護者・地域からの意見に耳を傾けるなど、足下をしっかりとみつめ固めていく姿勢と、私たちの研究を他に開いて意見を謙虚に受け止める姿勢は、今後も持ち続けていきたい。

また、本校は、ユネスコスクールとしての使命を十分に果たせていないまま、本年度の教育を終えようとしている。次年度に向けて、E S Dの学びが実践の伴った力に昇華されていくよう、ユネスコ協会をはじめ、他機関との連携も密にしながら教育活動を進めていくようにしたい。

<参考資料> ESDにかかわる本年度の研究経過

月	日 (曜)	内 容
6	11日(月)	ユネスコスクール加盟(承認)
7	6日(金)	☆富山ESD講座運営委員会(富山市役所)
	13日(金)	★校内全体研修会 <本校におけるESD指導計画について共通理解> ・ESDにおいて育てたい4つの力 ・主となる教育活動 ・研修の具体化(中間研究部会)
	18日(水)	○ユネスコスクール加盟記念集会 認定証とプレートの贈呈(古田顧問) 全校合唱(心が今日も笑顔)
	20日(金)	◇地域教育推進協議会(夏季)
8	1日～3日	◇地域教育懇談会(各町内公民館)
9	28日(金)	★中間研究部会 部会別研修会 ◇堀川校下敬老会
10	4日(木)	○児童集会「秋を楽しもう集会」 ★中間研究部会 単元検討会 ★中間研究部会 授業開始 ☆研究校視察 10月 5日(金) 富山市立中央小学校 ESD 実践発表会 10月 16日(火) 富山市立寒江小学校 ESD 公開授業研修会
	21日(日)	◇ふるさとづくり文化展 ふれあいフェスティバル
	26日(金)	○学校保健委員会 児童集会「よりよい生活習慣を身に付けよう」 ☆研究校視察 11月 14日(水) 富山市立光陽小学校 ESD 公開校内研修会 11月 16日(金) 富山市立五福小学校 ESD 実践発表会
11	22日(木)	ESD実践発表会 ○ 児童集会「私たちができることを見つけよう集会」 ・委員会発表(リサイクル、ベルマーク、くらしづくり) ・全校合唱(世界が一つになるまで) ★ 中間研究部会 提案授業 ・1部会 理科「身近な自然で見つけたこと」 ・2部会 社会科「わたしたちのくらしと路面電車」 ・3部会 国語科「棕鳩十の作品―大造じいさんとガン―」 ・4部会 算数科「表やグラフで伝えたいこと」
	28日(水)	◇三世代交流「小学生と一緒に楽しむ会」(堀川公民館)
12	1日(土)	☆富山ユネスコ協会 会員交流会
	14日(金)	◇地域教育推進協議会(冬季)
1	10日(木)	☆書き損じはがき回収の案内 *後日ユネスコ協会に提出 ・本年度累積回収枚数 693枚
	26日(土)	☆第4回ユネスコスクール全国大会(奈良)
	27日(日)	☆ESD富山シンポジウム(ファミリーパーク) ・本年度の取組みについて、掲示発表
2	14日(木)	★中間研究発表会
	15日(金)	〃
	24日(日)	学習発表会(学級ごとに一人一人が学びを発表)
3	1日(金)	☆持続可能なコミュニティづくりメッセ(愛知大学)
	5日(火)	○児童集会「児童会引き継ぎ」

☆関係機関連携

★校内研修

◇地域交流

○児童集会